

43 大分県立病院医学校における眼科診療について

山之内 卯一

大分県立病院医学校は、明治初期の西洋医師養成の全国的な波にのり、明治十三年三月開院、四月二日に授業が開始されたが、県の財政に全面的に依存していたため、明治二十年の勅令第四十八号による地方税補助の禁止により、明治二十一年三月廃校、病院も翌二十二年三月に廃院に追い込まれた。この間七十五名の医師を世に送り、診療を施した患者は三万人にのぼっている。

資料には大分県病院兼医学校年次報告として一次から四次、明治十三年三月から明治十九年十二月に及ぶ報告書が残されている。この年次報告は医学校及び病院の長を務めた鳥瀉恒吉が自ら編集兼出版人となり、開設当初からの病院及び医学校の概況を機構、診療、教育、財政の四つの面から、多数の綿密な統計を駆使し、極めて詳

細に述べたものである。年次報告書は和紙に、活版刷りである。

一、開校から廃校まで

院校設立については、明治九年十月、中津の医師藤野玄洋の陳情があり、同年十二月、県当局は藤野を含む大分県下の医師五名（佐野雋達・杵築、藤野玄洋・中津、宇都宮篠・大分、田吹玄珠・大分、下瀬文蔵・大分・漢方医）を招いて、その設立について諮問したのが始まりである。しかし、諮問から二カ月後、西南の役が始まり、大分県下も戦火を見たため、設立は棚上げとなったが、戦火収まった十一年には再び設立計画が復活し、県会に提案されたが、審議は行われず、明けて十二年三月再度設立予算が提出され可決された。

開校当時のスタッフは、学校側・鳥瀉恒吉（東大十二年卒）以下一名、病院側・鳥瀉院長、佐野雋達副院長他当直医三名、備医四名、薬剤師一名であった。開校時は乙種であったが、明治十七年には甲種医学校となり、開業試験は免じられたが、そのため学校職員も増加した。

病院は開院二年間は予想以上の収益をあげたが、三年

目からは、人件費の高騰に加えて収益減のため、県の会計を脅かし、やがて廃校を求める声が上がるといふようになり、こうした最中、勅令による県費補助の禁止が打ち出され、明治二十一年三月をもって廃校となった。在校生六十七名中四十六名が就学の道を断たれた。病院は独立病院としての発足を期したが、種々論争の後、結局明治二十二年三月閉鎖された。病院は鳥潟恒吉が引き継ぎ、同年四月「私立大分病院」として発足することとなった。

二、眼科診療について

外来診療は毎日十時から午後三時までの五時間、外来手術は毎週月曜と火曜、小手術は臨時に行われ、各医局員は午前八時出勤、午後三時には退出すべしとあり、日の長短により適宜伸縮することは勝手で、早く出勤し、早く帰宅するという習慣は、灯火のせいではなかったかという。因に大分に電灯が初めて付いたのは、明治四十二年四月である。入院病床は約三十程度、入院患者の診察は毎日三回、午前八時院長回診、午後三時と十時は当直医回診で、院長回診時是一名以上の当直医がこれに従った。当直医は現在の当直医とは異なり、県立病院の日

常診療を担当するもので、現在の部長クラスと言えよう。備医は当直医の下にあり、臨時医師で県立病院の診療の傍ら自分の医業をすることも許されていた。

病院の受診者は一年に約三千人で、その一割が眼科受診患者である。眼科診療の実態については不明であるが、鳥潟が主として関与し（彼の署名入りの眼科患者の診断書が在る）、手術も外科学を得意とした鳥潟の執刀によるものと考えられる。手術については、年次報告には、診断名、術式とその転帰が記載されている点が珍しい。

（平松学園大分視能訓練士専門学校）